



<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

## 2005年 近畿 4 支部新春合同例会のご案内

テーマ：アメリカ図書館協会認定校における

現職図書館員研修について－仮題－

講師：高 敏 裕樹氏（大阪教育大学講師）

日時：2005年 2月 5日（土）14:30～

場所：大阪市立弁天町市民学習センター・講堂

地下鉄「弁天町」駅西口 2 番出口

JR環状線「弁天町」駅北口

オーク 2 番街 7 階

TEL:06-6577-1430

会場アクセス：6 ページに掲載

参加費：500円

お問い合わせ・懇親会お申し込み

[dtkosaka@mail.goo.ne.jp](mailto:dtkosaka@mail.goo.ne.jp)

もしくは村上 06-6850-5071(職場)-

\* 例会終了後懇親会を予定しています。会場の都合もありますので、参加を希望される方はできるだけ 1 月 31 日までにお申し込みください。（会費・会場未定）

\* 高敏先生は、この度の講演に関連した著作として下記の本を執筆しておられます。ご参考にしてください。

☆『技量の継続的向上を求めて：図書館員の研修に関する国際動向』（共著・日本図書館協会，2004年）

☆『図書館調査研究レポート No. 3 図書館職員を対象とする研修の海外の状況調査』（共著・国立国会図書館関西館事業部図書館協力課，2004年）

→ [http://www.ndl.go.jp/jp/library/lis\\_research/lis\\_rr\\_01.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/lis_research/lis_rr_01.html)

### [目次]

|                                         |   |   |
|-----------------------------------------|---|---|
| 2005 年新春合同例会のご案内                        | … | 1 |
| 「第三者評価時代の研究者支援：引用データベースと特許データベース」に感化されて | … | 2 |
| シンガポールの図書館政策と Library2000               | … | 3 |
| 大学図書館問題研究会誌第 27 号刊行のお知らせ                | … | 5 |

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：[dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp)（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

京都ワンデイセミナー「第三者評価時代の研究者支援：引用データベースと  
特許データベース」に感化されて -インパクトファクター (IF) を中心に-

清嶋 愛

各種のデータベースについて「どんな機能があるか」という知識は必要なもの。ただ、データベースによって得られたデータを適切に利用するためには、そのデータベースが「どのようにして作られているか」、またその限界や問題点などに対する知識も欠かせないものかと思われます。

■セミナーについて

今回のセミナーでは、Web of Science については、その「機能」というよりも「どのようにして作られているか」が取り上げられました。例えば、「千葉のかずさ研究所で刊行されている”DNA Research” のインパクトファクター (以下 IF) は、JCR2002 年版において日本の学術雑誌の中でトップとなったが、これは Thomson で引用が多い雑誌として注目され、2002 年版より収録されることになった」という、製作側の話など興味深く思いました。また、大学のための特許調査については、「特許の世界は標準化がすすんでいない」、「特許申請中にその特許の内容が先に雑誌に掲載される」といった具体的な例を紹介しながら、特許になじみのなかった私にもわかりやすい内容で解説されました。

■『インパクトファクターを解き明かす』を読んで

さてセミナー後、IF について興味がわき、山崎茂明氏の「インパクトファクターを解き明かす」を読んだところ、かなり興味深い内容でしたので、ご紹介を。ですが、まずその前に…現在、私は雑誌契約・受入業務をしており、IF といえば、購入雑誌の継続を決めるアンケートを作る際に参考指標として利用するという程度のおつきあいです。ただ、電子ジャーナルの利用統計で、アクセスストップ 30 のタイトルについて、ために IF を調べてみたところ、アクセスの多さと IF の高さは必ずしも一致していませんでした。単純に「IF の高さ＝よく読まれる (利用される) 雑誌」とはいえないということで、気になる点が出てきました。冊子と違って電子ジャーナルという形式では、巻号・ページや「雑誌タイトルというくり」は希薄になったように思います。特に PubMed などの文献データベースから、フルテキストにリンクをたどってアクセスした場合、「雑誌のタイトル」を意識せずに、論文に到達することになります。また、ひとつの雑誌の中で、「大量に引用される論文」でも「全く引用されない論文」でも、ひとつの雑誌に掲載されている以上は同じ IF といってよいのか、ということもあります。こうなりますと、雑誌の評価指標である IF を単純に論文の評価としては使えません。他にも、はたして「論文のダウンロード回数」＝「利用回数」と言い切れるのかという疑問点もあげられます。本書では、IF の正しい理解をすすめており、IF は個人や大学の業績評価の参考になるのかもしれないが、それを絶対的な評価として過信するのは誤りであるということが、具体的な事例をあげながら解説されています。その中で、当の考案者である Garfield 博士も「インパクトファクターは雑誌の重要度を示す一つの指標であり、個々の研究者の評価に利用しないように」と注意を喚起してきたとあります。また引用索引データベース製作側からも「掲載された雑誌の IF 値を足し合わせ個人や大学全体の業績評価とするような使われ方が目立つ」との問題指摘があったことも書かれています。詳細はぜひ本書をご

一読下さい。

大学も評価を受ける時代となりましたが、評価のむずかしさを感じます。数字はものごとをはつきりとさせるのにとっても便利ですが、数字だけが勝手に一人歩きしないよう、その数字がどこからどのようにして出されたものなのかを、理解する必要性を感じた次第です。

・山崎茂明「インパクトファクターを解き明かす」情報科学技術協会 2004年

きよしま あい (滋賀医科大学附属図書館)

---

## シンガポールの図書館政策と Library2000

福井 京子

---

“The general opinion was : Singapore is going down the drain, it is a poor little market in a dark corner of Asia” 「大方の意見として、シンガポールは奈落の底に転落しつつある。それはアジアの暗い片隅の小さな貧しい市場に過ぎない」。この文は、1960年、経済政策をアドバイスするため、初めてシンガポールを訪れた世界銀行の使節団が提出した報告書である。それからわずか40年余りで大方の予想に反して (against the odds) シンガポールは急成長を遂げた。このシンガポールの急成長には様々な要因があげられるが、政府のリーダーシップの強さが注目される。シンガポールの政策は、長期的 (10年から30年程度) 視野に立ち、中途半端な妥協を排した合目的性なもので、総合的と効率性に特色がある。図書館および情報の分野でも、あらゆる部門での情報技術の利用を進めるため、情報化計画を策定し、その実現のための作業が進められている。

歴史的に見ると、1819年、シンガポールは東インド会社のイギリス人トーマス・スタンフォード・ラッフルズ (Sir Thomas Stamford Raffles) により世界史の舞台に引き出された。その後、シンガポールは自由貿易港として発展していく。1942年から1945年、日本の占領下となるが、日本軍の降伏により連合軍の占領下となったシンガポールは翌年再びイギリス領となる。1959年、立法評議会における選挙において人民行動党が第一党となり、リー・クアンユー (Lee Kuan Yew 李光耀) が首相となった。そして1963年、シンガポールはマレーシア連邦の州の一つとしてイギリスから独立した。しかしながら、マレー人優遇政策を掲げるマレーシア連邦中央政府とシンガポールは政治的・経済的に対立していき、ついにシンガポールは1965年マレーシア連邦を脱退、シンガポール共和国として現在の形での独立を果たした。独立後のシンガポールは対外的には全方位的な外交、対内的には華人系、マレー系およびインド系を中心とする多民族国家として民族の融和を図る施策を行い、「クリーン&グリーン・シティ」と呼ばれる緑溢れる都市国家をつくりあげた。また、経済的にも1997年のアジア通貨危機を乗り切った後も順調な発展を続けており、東南アジアにおける貿易、交通の拠点として注目を浴びているが、政府は金融、バイオやエレクト

ロニクスなどの最先端技術、交通および物流、そして通信・メディア・人材育成・教育などの各分野で地域のハブとなるための政策を着々と進めている。

その政策の主要なものは、次のようなものである。

- (1) シンガポール 21 (Singapore 21)
- (2) PS21 (Public Service 21)
- (3) マンパワー 21 (Man power 21)
- (4) シンガポール・アンリミテッド構想 (Singapore Unlimited)
- (5) ツーリズム・アンリミテッド構想 (Tourism Unlimited)
- (6) 金融立国政策
- (7) IT2000 構想 (Information & Technology 2000)

このうち IT2000 構想は、1992 年通商産業省傘下の国家コンピュータ庁（現在は、情報開発通信庁 National Computer Board）により発表された構想で、シンガポールにおける情報技術開発施策の基本となっている。情報技術および情報インフラストラクチャーの広範囲な開発・整備によりシンガポールを「インテリジェント・アイランド」化することで、国民生活の質の向上を図るだけでなく、情報化時代におけるシンガポールの国際的な地位を高め、アジア太平洋地域における情報技術の中心地へと発展させていく「IT ハブ化戦略」が盛り込まれている。主要施策としては、①行政部門における情報化の推進 ②主要産業における情報化の推進 ③国家情報インフラの充実 ④情報技術産業の育成 ⑤情報技術人材の育成等がある。自然資源の乏しいシンガポールにとって最大の「資源」は「人材」である。図書館を基盤とした「学習国家としてのシンガポール」を発展させていく図書館政策が重要になってくるのである。IT2000 構想に基づき 1992 年に発足した Library2000 レビュー委員会はシンガポールにおける次代の図書館システム整備のあり方を検討し、ついに 1994 年に Library2000 構想が発表された。Library2000 構想は NII (National Information Infrastructure) を基盤として図書館システムの整備を行うものである。この構想実現のために、1995 年国立図書館委員会法 (National Library Board Act) が制定され、情報芸術省のもとに新たに国立図書館委員会 (National Library Board : NLB) が設置された。そして世界でもあまり類をみない国立国会図書館および公共図書館の両機能を管理、運営することとなる。

Library2000 構想は以下に示す、6つの戦略目標がかかげられ、システム改革がすすめられた。

- (1) 新しい情報資源やニーズの多様化に対応できる公共図書館システムを構築する。
- (2) 国内外を問わずいつでも、どこからでもアクセスできるネットワークを整備する。
- (3) 各図書館が連携、協力して豊かなナショナルコレクションを構築できるように調整し、形成する。
- (4) 利用者の求める質の高い市場指向のサービスを提供する。
- (5) 産業界や地域と共存、共生していく図書館を構築する。
- (6) シンガポールが持つ知識仲介機能としての役割を確立する。

この構想について「シンガポールにおける図書館・評価サービス活動の現状」で原田、永田（注 1）らは「図書館やデータベース作成の問題は、(中略) 平坦な道ばかりではないだろう。シンガポール国立大学図書館のような十分なレベルに到達しているものもあるが、一般には図書館システムは、様々な問題点が指摘されており、その基盤はやや脆弱である。したがって Library2000 の施策が速やかにかつ強力に実施されることが望まれ、その前提として、最も重要な人の問題のための体制整備（図書館・情報の専門職の養成及び現職員の再教育）が行われねばならない。しかしこれがクリティカル・パスとなるかもしれない。」と述べている。

1994年に政府に受理されたLibrary2000構想は、当初10年ないし20年で実現されるという見通しであった。その予想に反して8年という短い期間(1995～2003年)でNLBは「2004年シンガポールクオリティ賞受賞」(2004 Singapore Quality Award Winner)という評価を得たのである。

NLBのニュース速報によるとNLBは「2004年シンガポールクオリティ賞(SQA)」の3つのうちの一つとして授与された。SQAはシンガポールでのビジネスの卓越したものとしての最高の賞であり、卓越した世界クラスのレベルに達成した“best of the best”と評価され、授与されたのである。

これにより、利用者を満足させるという、NLBにとっての第一目標は、達成されたことになる。

注1: 原田勝・永田治樹、シンガポールにおける図書館・情報サービス活動の現状、学術情報ネットワークの基盤構造に関する調査研究—アジア・太平洋地域における—(SISNAP report; 5) 文部省科学研究費国際学会研究学術調査(研究課題番号: 06041014) 平成7、8年度研究報告、1998、54-55

- ・呑海沙織、シンガポールの図書館IT戦略、カレントアウェアネス【CA1499】、No276、2003、19-22
- ・井上健太、シンガポールDIY図書館、カレントアウェアネス【CA1517】、No279、2004、4-6
- ・長田秀一、シンガポール「IT2000」と国立国会図書館、カレントアウェアネス【CA1136】、No215、1997、4-6
- ・小田嶋ひとみ、補佐職員の実態—シンガポールの例—カレントアウェアネス【CA1362】、No257、2001、7-8
- ・田村慶子、エリア、スタディーズ シンガポールを知るための60章、明石書店、2001
- ・National Library Board Singapore, (online), available from <http://www.lib.gov.sg/> (accessed 2004.10. 4)

ふくい けいこ (京都大学教育学部図書室)

## ■ 大学図書館問題研究会誌 第27号刊行のお知らせ ■

大学図書館問題研究会会員の活動や研究の成果を発表する媒体として年3回刊行されております、大学図書館問題研究会誌の第27号が刊行されました。今号に収録されている記事は以下の通りです。

<大学図書館問題研究会誌 第27号(2004.12) 目次>

- ・「自動化書庫システム(AutoLib)におけるサイズ別フリーロケーション方式と固定入庫方式について—国際基督教大学図書館の運用事例報告 pt. 3—」(黒澤公人)
- ・「電子図書館サービスの新たな可能性—欧米の動向のレビューを中心に—」(尾城孝一)
- ・「京都府図書館総合目録ネットワークと連絡協力車による相互貸借」(河原茂記)
- ・「地域図書館ネットワークと大学図書館—京都学園大学図書館の場合—」(大館和郎)

- ・「公共図書館との連携 - 教科学習の充実のために -」(小河富代)
- ・「私と大学図書館」(池内了)

価格につきましては、大図研会員は 800 円、非会員は 1000 円となっております。購入をご希望の方は、お近くの支部委員まで声をおかけいただくか、電話・FAX・メールにてお申し込みください。なお、本誌の詳細及びバックナンバー等の情報は、大学図書館問題研究会ウェブサイト <http://www.daitoken.com/> に掲載されています。

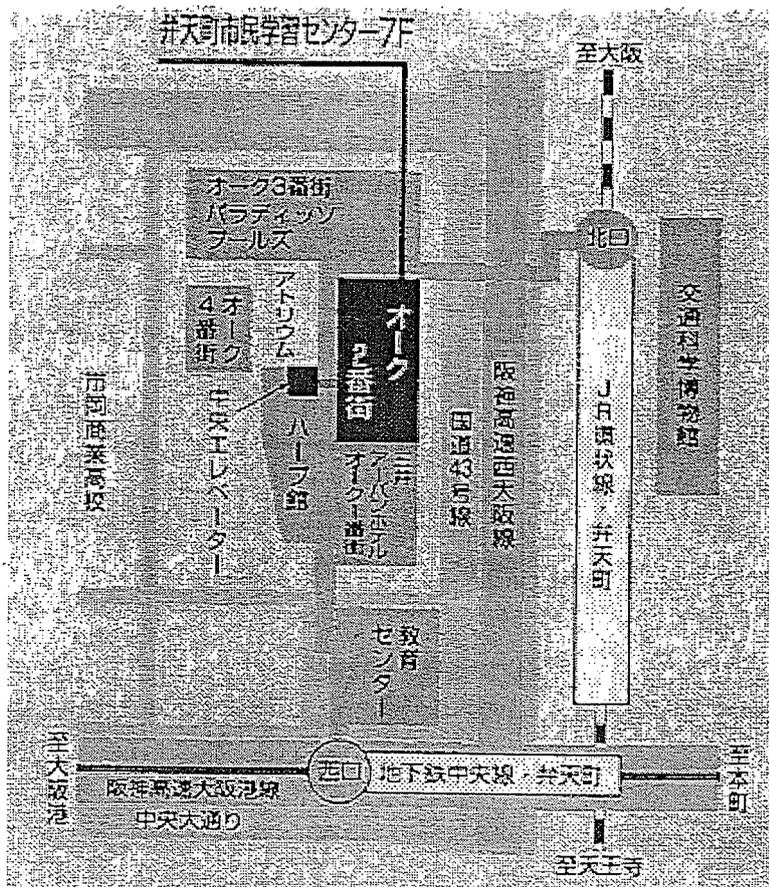
■お問い合わせ先■

E-Mail : [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp)

支部委員名簿 (大学図書館問題研究会京都支部ウェブサイト内) :

<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/iinmeibo.htm>

近畿 4 支部新春合同例会 会場へのアクセスマップ



ウェブサイト :

- ・「オーク200 アクセスガイド」 <http://www.orc200.com/access/ac.html>
- ・「大阪市立弁天町市民学習センター」

[http://www.city.osaka.jp/kyouiku/sisetu/establish02\\_1.html](http://www.city.osaka.jp/kyouiku/sisetu/establish02_1.html)